



第25号

さらしなの里

友の会だより



2011・秋



上の写真は、須坂地区・水天宮付近の堤防道路から望む冠着山とさらしなの里。塚田尚志さんお勧めのスポットは水天宮から北に約300m。ほかの写真は、堤防道路を楽しむ人たち（撮影・編集部）

堤防道を走る至福の時間

毎週土曜朝6時過ぎ、いつものとおり短パンにTシャツという出で立ちで、平和橋のたもとを出発して、一路若宮の大正橋のたもとまで約4kmの堤防道路を南上する。この道は歩行者と自転車専用で車は通れない。しばらく進むと両側に稲穂。そして砕石場の脇を走りぬけると左に千曲川の岸辺、はるか遠方に鏡台山の頂き、右前方に目を向けると冠着山の雄大な裾野が広がる。もうかれこれ20数年見ている光景である。

時折すれ違うランナー、犬を連れた人、夫婦で散歩する人、いずれも「おはよう」「こんにちは」と声をかけてくる。知らない人なのだが、ある時ふと考えてみた。赤の他人なのになぜみんな挨拶をするのだろうか。これはきっと千曲川と冠着山の魅力に取りつかれ、ここ千曲川堤防道路に集った同志の証かと勝手に考える。

思えば30歳を過ぎたころ、体力の衰えを感じて健康と体力の増進というささやかな目的で始めたランニングも、いつしか長野マラソンを走るまでになり、いまや走ることが完全に生活の一部になってしまった。ただ4年前、腰の手術をしてから走る目的が変わった気がする。それまでは景色を見る間もなく早く走りたいという思いであったが、いまはゆっくり景色をみながら楽しんで走ろうと思うようになった。

そんな思いをめぐらせて進むと、この道程のなかで私がお勧めの絶景スポットにさしかかる。雄沢川にかかる橋を渡って直角に曲がった瞬間だ。左側に千曲川が急に迫ってくる。大水の時は堤防が決壊するんじゃないかと思えるくらい川が蛇行している。目を右上方に向けて冠着山が圧倒的な存在感でそびえている。冠着山はどこからみてもかっこいいのだが、このスポットこそが一番わくわくする瞬間。千曲川と冠着山を同時に味わえるとは。さらしなの里に生まれ育って本当に良かったと思える至福の1時間である。（羽尾四区・塚田尚志）

NBS長野放送が「更級」の特集番組



「西尾佳の新更級紀行」

更級郡大岡村と長野市との合併により、更級の名が地図上から消えて久しい。

平安時代に書かれた更級日記や松尾芭蕉の更級紀行からも分かるように、更級の里は古くから日本中に知られる場所だった。そんな更級の魅力を再発見しようと、長野放送の西尾佳アナウンサーが旅に出かける。

千曲川を見下ろす姨捨の棚田は、田毎の月でも有名な名勝。そんな美しい景色を臨む長楽寺は、芭蕉をはじめとする文人たちが訪れ、多くの歌を残した場所。西尾アナも一句を捻った。

千曲市稲荷山では、20年以上続くお好み焼き屋さんで舌鼓を打つ。旧大岡村では神戸から移り住んだ夫婦が営むフレンチレストランで、地元食材をふんだんに使ったランチをいただいた。



古代から都の人たちのあこがれの地だった「更級郡」という地名が、大岡村が長野市に合併したことによって消滅して6年。そのことを残念に思うNBS長野放送のディレクターが、「新更級紀行」という特集番組を制作し、6月20日、「月曜スペシャル」で放送されました。

アナウンサーの西尾佳さんが、今もなお「更級」という地名を愛するたくさんの人たちを訪ね、それぞれの思いや現在の暮らしを紹介した番組です。共和地区(旧更級郡共和村、現長野市)のりんご農家、稲荷山のお好み焼き屋さん、長楽寺：北からだんだんと南に旅をしてきて、当地では更級小

学校が重要な取材対象になりました。校歌が三番まですべて在校生たちの歌声とともに紹介されたのには驚きました。校歌の作詞者である浅井冽さん(長野県歌「信濃の国」の作詞者)もさぞうれしかったことでしょう。

私も取材を受けました。「更級郡がなくなつて残念でしょう」と尋ねられました。更級小を代表に当地に「更級」という名前が定着し残ったことの有り難さを強調しました。

明治の町村合併で、初代村長の塚田小右衛門さんが新しい村の名前に更級を選んだことがそもそもの始まりです。更級郡はなくなつても更級のエッセンスは冠着山(別名・姨捨山)のふもとにの当地に凝縮しています。

番組を企画したディレクター、梨子田眞さんの熱意も有り難かったです。西尾さんは北海道生まれですが、信州の魅力に引かれ、職場を決めたそうです。番組は約50分。ご覧になれなかった方は大谷までご連絡ください。写真は、「新更級紀行」の内容を紹介するNBSのホームページです。(大谷善邦)

ウド鈴木さんらが縄文体験



さらしなの里古代体験パークを舞台にしたNHKのテレビ番組(Eテレ・旧教育テレビ)が10月15日、オンエアされました。タレントのウド鈴木さんをメインキヤラクターに森の楽しさを紹介する「モリゾー・キッコロ森へいこうよ」という連続番組です。

森と関係の深い暮らしを送っていた縄文人を特集する場として、当パークがふさわしいと選ばれたようです。番組のタイトルはウドさんらしく、「ドングリそまつにしたらいやよい(弥生じようもん(縄文)すみません)」。元当館学芸員の翠川泰弘さんを中心に、縄文人とドングリの関係に関心のあるウドさんらの質問に答えたり、縄文ハングの料理体験を手伝いました。

録画したものがあるので、当館にお問い合わせください。(柴田洋一)

「友の会だより」がインターネットに

さらしなの里の友の会だより、友の会だよりのコーナーが設けられています。クリックすると、PDFが現れ、印刷もできます。

さらしな堂は、さらしな・姨捨にまつわる歴史や文化、現代のトピックを紹介する「更級への旅」新聞を不定期で発行しており、このホームページには同新聞の全バックナンバーを載せました。さらしなの里友の会が中心となって毎年秋に開催している「さらしなの里縄文まつり」に関する情報も掲載されています。アドレスは <http://www.sarashinado.com/> です。「さらしな堂」で検索してもヒットします。



お菜洗いの弁天清水



さらしなの里・仙石区の西、湯沢川の橋を渡って百メートルのところに、昔から初冬の12月初めごろになると主婦が集まる、お菜洗いの弁天様(左の写真)があります。大雨が降ろうと日照りであろうと、一年中、水量、温度の変わりのない湧水(清水)です。夏は冷たく、冬は温かく感じるのでお菜洗いにはもってこいの場所だったのだと思います。

祠の石垣の下からこんこんと湧いているおいしい水です。この弁天様の水は千曲市の水質検査でも、飲料水として不合格になったことはありません。郷土史研究家の塚田折男さん(故人)は、さらしなの里友の会だより3



号の「おらほの冠着」で、冠着山に降った雨が百年をかけてさらしなの里に清水として湧き出ていると書いています。弁天様の水は方々にある清水の中でもあまり知られていない良質の水ではないかと私は思っています。

私が子どものころは、弁天様から流れ出る小川にホタル

祠の下からこんこんと、冬は温かく

ルの幼虫の餌になるカワニナがたくさんいて、六月初めごろとなると、ホタルが乱舞―幻想的な風景を醸し出していたことが忘れられません。蚊帳の中に放して楽しんでいたのです。初冬の雪がちらつき始めるころは(昔は初雪が早かった)、主婦の年内最後の大仕事、お菜洗いの季節でした。お菜は寒い冬を過すために欠かせない栄養のある野菜の漬物になります。大勢の方々にぎわい話はずんでいました。

今も、秋祭り(9月23日)前日の朝には、祭典係の人たちの手によって、幟が立てられます(右の写真、西沢保雄さん撮影)。「豊年満作神」「五穀豊穰」と書かれています。花柄池に上がる途中の山際と花柄池の奥にもそ



れぞれ祠が一基ずつあり、その脇からも清水が湧いています。花柄池奥の祠のそばには松の大木もありましたが、松くい虫で数年前に枯れましました。この二つの祠も弁天様と関係のある祠かと思いません。お祭りの前に祭典係の人と区議員の方が、まわりをきれいにしています。

弁天様の水は冠

着山の自然が現在の私たちにくれた尊い贈り物だと思います。弁天様の広場は構造改善事業で狭くなりましたが、周囲を整備し、山際にまだ少し生息するホタルを見る場所にしてもよいかなと思います。

田んぼが広くなり、昔の道はなくなりましたが、弁天様の小川に沿った道が、現在の明治新道入口の50メートル上、浦島屋さんの少し下まで続いています。あくまでも私の推測ですが、東山道の一部ではなかったかと思えます。御麓の方から下ってきて、寒い冬は弁天様の比較的温かい広場で、飯縄山や千曲川の清流を眺め、ひと休みしてから、幅田、三高神社の前を通り、代、八幡の方へ旅をして行ったのではないかと思います。右下の写真は戦後の昭和20年代前半、弁天様近くの田んぼで馬で代掻きをしているところです。(仙石区・金井信太)

冠着を詠んだ佐久間象山の歌、漢詩

おらほの冠着

25

今年(1999年)は佐久間象山の生誕二百周年。江戸幕末に西欧の科学技術を導入し国力の充実を訴えた松代藩士だが、その象山が仲秋の名月に、さらしなの里で詠んだ和歌がある。

わがくにの冠着山に見る月ハ
カルホルニヤのあけぼの、空

天保8年(一八三七) 8月15日、象山27歳のとき「更科山」(冠着山のこと)に遊び月見の中でいくつもの和歌と漢詩を詠んでいる。ただ、この和歌がそのときのものであるかは定かではない。詩の情景は親

世界への関心があった。この歌には、冠着山から世界をイメージし、いまにアメリカ大陸まで自分の手の中に入れてしまふんだという、とてもない大きな気持が現れている。

同じような気宇壮大な漢詩を志賀高原・岩菅山に登ったときにも作っている。「東南夷島を呑み南富士山がそびえるこの国で目を東に向ければ、アメリカ大陸(夷島)を呑み込んでしまふほど私は盛んであると、自信にあふれている。象山は江戸の神田「お玉が池」に象山書院を開いて西洋学などを教えていたが、帰藩命令が下ったので書院を閉鎖し、愛人二人「お蝶」「お菊」とともに松代に戻る。のち、門下生だった勝海舟の妹「お順」を正妻に迎える。ところが地元の松代にはさらに「お玉」という愛人がいたようだ。四人の女性に囲まれた、藩より借りた「お使者小屋」で暮らすようになった。このことで象山はいろいろ問題を抱えてしまう。



そこで親交のあった佐良志奈神社神主の松田(豊城)直友氏に相談。「お蝶」

は直友氏宅内に別邸を建築して暮らすことになる。秋のころ、象山は一番愛した「お蝶」に会うため、松代城下より白馬に乗り宮坂峠を越え千曲川で白馬を洗い、「お蝶」のもとに通った。

直友氏はかつて象山が鉢で育てた金木犀の盆栽をもらい受け、その金木犀は庭に移し植えられて大きく育っていた。象山はその花の下で笛を執って「お蝶」と遊ぶ。そして中国浙江省にある「天姥山」を嫉捨山(冠着山)に見立て漢詩を詠んだ。

天姥山頭秋月明らかに
天姥山下秋水清し

夜深くして好し
紫簫音を執つて

丹桂花陰に鳳声を学ばん

秋水は千曲川の流れ、丹桂は金木犀のこと。鳳声とは中国春秋時代、秦の君主の娘が縦笛の簫を一度吹けば吉報の象徴である鳳凰が飛んで来て御殿の屋根に止まったという伝説にちなんだ言葉。この漢詩の意味は、月と千曲川がお互いに美しく見せ合うさらしなの里の光景を、金木犀の花の香りがさらに味わい深いものになっているという感じだ。文久4年(一八六四)、象山は京都で暗殺された。

写真は象山から直友氏がもらい受けた金木犀の今の様子。佐良志奈神社神主宅玄関前で今も香りを放っている。(羽尾四区・大橋静雄)

資料館だより

みなさん、こんにちは。この4月から、さらしなの里歴史資料館でお世話になっていきます。

当館では大勢の方が縄文体験をしていかれますが、特に小学校の団体が多く、大型バスで来館されます。旅行に行ったとき、泊まった旅館からバスで出発する際に、旅館のスタッフの人たちがいつまでも手を振って見送ってくれて感動したことがあります。当館でも、来館者がバスで帰るときは、当館職員スタッフが全員で手を振ってバスを見送ります。このような職場で仕事ができる幸せに感じます。

特に西東京市の小学校の児童が大勢来られます。今年度は、児童、引率者合わせて約500人が来館されました。同市の小学校からの来館は10年ほど前から盛んになっていきましたが、来館者数が減少してしまっていますが、当館の魅力をさらに磨くべく、がんばらねばと思います。(柴田洋二)



〔編集後記〕千曲川の堤防西側道は当地の宝だと思えます。40分にも達する歩行者自転車専用道は国内でも有数です。歩くこと走ることは、からだだけでなく頭も鍛えるそうです。NBSの特集番組のタイトルは松尾芭蕉の「更科紀行」を踏まえています。「さらしな」は今もブランド地名です。弁天清水のお菜洗い。昔の様子を写した写真をお持ちの方はいらっしやいませんか。

編集・発行

さらしなの里友の会だより編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

二三八九・〇八二二

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六(二七六) 七五一一

Fax 〇二六(二六二) 四一六一